

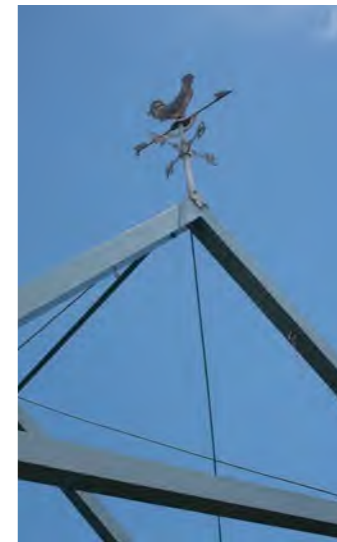
農地と宅地を区分

農の楽しさを伝える都市型体験農園

白石農園…農業体験農園・大泉 風のがっこう(東京都練馬区)



「大泉 風のがっこう」主宰者・白石良孝さん



体験農園入口は風見鶏が目印



6月下旬、トウモロコシが元気に育っていた

■ プロジェクト実現のプロセス

東京都練馬区大泉町の白石農園は、江戸時代初期から十数代続く都市農家。消費者への野菜の安定供給を目指しつつ、都市農家として地域での多くの役割を担いながら、新しい農業経営を成功させている。

その核となる事業が、平成9年にスタートした「農業体験農園・大泉 風のがっこう」(園主・白石良孝さん)。この事業は、平成4年ごろ、生産緑地法の施行で閉鎖に追い込まれる市民農園が増加したことを受けて、都市農業の立て直しを図ることから始まった。白石さんの友人・加藤義松さんが「農家が自分の農地で野菜作りを指導するのはどうか」と呼びかけ、それに共感した白石さんが、加藤さんとともに練馬区と連携して活動を開始したところから始まっている。

行政とともに勉強会を経て、平成8年に加藤さんの体験農園「緑と農の体験塾」が、翌9年に白石さんの「大泉 風のがっこう」が開園。練馬区には施設整備費・管理運営費の一部を助成する制度もあり、以後、毎年1園ずつ開園し、平成20年現在

で13の体験農園が、農家の主導で経営・管理されている。

■ 白石農園の取り組み

利用者は、農家の指導によって、種まきや苗の植付けから収穫まで一年を通じて体験し、年間約20種類の野菜を収穫する。1年で1世帯4万3000円(同区民には補助あり)の利用料には、入園料、種子代、肥料代、農薬代、資材代などが含まれ、収穫した野菜は利用者が購入しているという意味合いで与えられることになる。1区画30㎡と決まっており、白石農園では現在125区画、農園全面積の約3分の1で50aが体験農園に充てられている。

農家は、講習会を開き、土作り・植え付け・種まき・農薬の役割などを指導し、苗、種、堆肥や鍬・鋤などの道具を用意。水道施設、物置、ベンチ、トイレなども設置する。作付け表に従い、どの区画も同じように、農薬の使用などについては個人の考えを尊重しながら、ジャガイモ、ホウレンソウ、コマツナ、キャベツ、ダイコン、インゲン、トウモロコシ、エダマメ、トマト、キュウリ、ナス、ピーマン、シシトウ、サニー

レタスなどを収穫できる。利用者の年齢層も三十代の親子から七十代と幅が広く、1年を終えた体験者がその後も継続するケースが多いという。継続は基本的には5年間可能となっている。

農への関心が高い消費者のニーズに応えるこのシステムは、練馬区の事業が全国で注目されて、都内で60軒となり、経営ノウハウは東京都農業体験農園園主会を通じて提供されている。

■ 仕組みとメリット

市民農園は地主から行政が土地を借り受け、希望者を募集して市民に貸し、指導者などはないので、種や肥料、道具なども利用者がすべて自ら用意して作業しなければならない。しかし体験農園は、利用料にすべてが含まれており、農家という野菜作りのプロの指導のもと、確実に多くの種類と量の収穫物が得られるというメリットがある。

また、生産緑地法により、農作物の栽培目的で農地を貸す貸借関係が農業経営と認められないのに対し、体験農園は、農家が年間計画や指導を行うなど、耕作の主体と



作物は種類ごとに並べて栽培している



夏場は収穫物が多く、毎日のように通う参加者



隣接のレストラン「La 毛利」では白石農園の野菜が味わえる



体験農園で作っているトマトとキュウリ



収穫が何よりうれしいという豊泉多恵子さんは農関係の雑誌編集者



白石農園で採れた野菜が購入できる、農園横の無人販売機



リタイアしたので農業をやりたいと、今年初めて参加した小島洋幸さん



松村義則さん(左)は10年目、鈴木昭彦さん(右)は9年目のベテラン。農園がコミュニケーションの場にもなっている

なるため、農業経営と認められている。相続の際にも、相続税納税猶予の適用が可能で、農地面積の減少を防ぐことにもつながる。

もうひとつの深刻な問題である農家の高齢化による後継者や人材不足についても、作業は利用者が各自行うため、農家の農作業の負担が軽減され、収入としても市場価格などに左右されずに長期の安定収入として見込めるという大きなメリットがある。例えば10aあたりの粗収入が、キャベツを年間2回収穫して70万～80万円なのに対し、体験農園では100万円ほどになるという。

実利のほかにも、住宅が隣接する都市のなかで農業を継続していくためには地域住民の理解が欠かせないことから、体験農園

を通じて農家と都市住民の交流が密接になる点も重要となる。農園体験で自然にふれながら収穫を喜び、仲間との交流で活力を見いだす利用者とのコミュニケーションで、農家も農の価値を高くもてるようになってきている。

「大泉 風のがっこう」では、体験農園のほかに落語独演会やビニールハウス内でのコンサートを企画するなど、農に関心をもたない人が農と出会えるきっかけとなるような活動も行っている。

■ 新しい役割と魅力

白石農園では、体験農園事業を開始する以前の平成3年に区内小学校のジャガイモ、サツマイモの収穫体験を始め、平成5年からは練馬大根生産体験を受け入れてい

る。平成15年からは、小学校だけでなく保育園児のジャガイモ収穫、ダイコン生産体験、中学校や養護学校の職業体験を受け入れ、都内の幼稚園、小中高校での野菜作り指導も行っている。平成14年から、学校で「総合的な学習の時間」が始まり、食と農を結ぶ学習が注目されてきた。学校教育の場で野菜や米を育てる試みが増えていることから、積極的に受け入れや指導に取り組んでいる。

食育の面では、平成8年から、新鮮な地場産野菜を子どもたちに食べさせたいという思いと、学校からの要望もあり、栄養士や調理員の理解と連携を取りながら、区内の八坂小学校、大泉第一小学校、八坂中学校の学校給食に旬の野菜を提供している。そのほかに、秋には区内小学校の校庭

の桜やケヤキの落ち葉を回収し、給食から出る生ゴミと合わせて堆肥を作っている。その堆肥は野菜の生産に使われ、収穫された野菜が再び学校給食に提供されるという循環システムを生んでいる。

さらに、園芸療法としても農園が癒しの効果をもたらすことから、精神障害者の社会復帰の準備やリハビリのための受け皿ともなり、畑がデイケアの場としての役割も果たしている。

また農園には、農園で採れた野菜を使った料理を提供するレストラン「La 毛利」が併設されている。スタッフはレストランの裏で野菜作りを体験し食材への理解を高めている。野菜以外にも、各地の漁港から直送される魚介類など旬の食材や自家製ベーコン、パンを気軽に味わうことができる。

■ NPO法人の立ち上げ

都市農業として新鮮で安全な農産物を生産し、農業を通じて環境、教育、福祉など多くの役割に尽力しながら、さらに研究・発展させるため、白石農園では体験農園経営者7人とともに、平成15年に「NPO法人 畑の教室」を立ち上げている。これまで、山梨県増穂町平林地区の棚田オーナーの募集をしたり、同地区の登り窯陶芸教室を白石農園のビニールハウスで行うなど、その

活動の幅はさらに広がっている。学校と農家を結び支援活動の強化拡充のための資料やガイドを掲載したホームページを開設して農業の社会的貢献に努めており、さらなる農業の可能性を示唆する活動の展開を見ることができている。

プロジェクト概要

所在地	: 東京都練馬区大泉町1-54	事業期間	: 体験農園1997年オープン
土地面積	: 農地1.3ha、体験農園50a	施行者(事業者)	: 白石好孝
計画地域	: 市街化区域内	URL	: http://shiraishifarm.blog.so-net.ne.jp/
土地利用規制	: 生産緑地地区		
事業手法	: 家族経営農家		